

森本桂博士の逝去を悼む

渡辺泰明

〒194-0043 町田市成瀬台2-26-33

長谷川道明幹事から本学会名誉会員の森本桂博士が9月3日に亡くなられたとの電話連絡を受け驚くと共に痛恨の思いに沈んだ。森本桂博士（以下森本さんと呼ばせていただく）が病床にあることは小島弘昭博士から伺っていて、最近は多少病状が改善されていると聞いていたため、この知らせは正に青天の霹靂の思いだった。

森本さんは昆虫と係わりのある人なら誰でもが知っているように、ゾウムシの系統・分類に関する世界的権威で、多くの優れた研究論文を発表されている、それと共に「日本昆虫学会」や「日本応用動物昆虫学会」等昆虫に関する主要な学会の役員として昆虫に関する啓蒙・発展に尽力されていた。とりわけ、日本昆虫学会の中に「日本の昆虫編集委員会」を立ち上げて、日本昆虫相の早期解明と基礎情報の充実・集積を目的とした「The Insects of Japan」の発刊に尽力された事は、昆虫分類学分野での偉大な足跡として忘れられない業績である。

私が森本さんと親しく口をきくようになったのは1960年代中頃に、森本さんが当時目黒にあった「林業試験場」に勤務されていた頃からと思っている。当時、私は日本昆虫学会関東支部の幹事として東京農業大学で行われている例会や大会等の支部活動の立案・実行に携わっていた。森本さんは、この支部大会で1964年に「単為生殖するゾウムシの分布について」、更にその翌年には当時林業試験場での主要研究課題の一つである「シロアリに共生する原生動物」に関する講演を行っている。

この支部大会終了後には希望者による懇親会が恒例になっていて、出席者間でそれぞれの研究課題についての情報交換が行われていた。また、アルコールが適当に廻った時間帯では、のど自慢？の人達が各人得意の歌を披露することもあった。この席で、森本さんは九州高千穂地方で歌われている代表的な民謡の一つである「刈り干し切唄」を披露された。高潔・厳正な学者肌の人と思っていた森本さんによる牧歌的な日本民謡の絶妙な節回しに聞き入った。それと同時に学者肌の人と思っていたのに意外な人間的一面に感じ入った思い出がある。

その後、森本さんは九州大学に戻られてから一層精力的にゾウムシの研究に打ち込まれ、昆虫に関する学会の大会時でお会いする度ごとに、ゾウムシの分類・系統に関する知見を伺う機会を得て大きな刺激を受けた。特に、私が1961年に「鳥島昆虫相の調査」の折にシチトウエビヅルから採集した後翅の退化したゾウムシの同定をお願いしたところ、新属新種として同定されて、1961年に *Torishimazo watanabei* (和名はトリシマヒメカタゾウムシ) として、私に献名・発表していただき、この細やかな配慮に感動させられた。また、私が本学会の前々身である甲虫談話会で発行していた「甲虫ニュース」の編集に携わっていた折、巻頭に甲虫類の科ごとの総説を連載していた。しかし、1979年発行予定号の巻頭に掲載する総説記事が無くて困っていた折、無理を承知で森本さんに執筆をお願いした所、快くお引き受けいただき感謝に絶えない思い出がある。そして、ミツギリゾウムシ科に関する総説を二回に亘って、この科の定義、研究史、更に形態的特徴に基づく2亜科、6族、14属および当時日本に分布が判明していた26種について、豊富な写真と付図を用いて精密な形態的特徴を記述され、同好者が容易にこの科に含まれる種の同定が可能なモノグラフを執筆していただい



左端、筆者。左から2番目、森本博士。
1980年8月6日。国際昆虫学会議甲虫研究者採集会にて。

た。

一方、私は森本さんからご自身が1964年に長野県Kanoで採集されたコバネナガハネカクシ属に含まれる4個体をご恵与いただいた。しかしながら、私が研究室移転等の事情でこの個体を検討することなく半世紀の時間が過ぎてしまった。近年になって、私が農大を去るに当たって標本整理をしていた折に、これらの埋もれていた個体を見出し検討した結果、未記載種と判明したので、2016年に *Lathrobium (Lathrobium) morimotoi* として「Elytra, New Series」誌上に記載発表した。この種小名はもちろん採集者の森本さんに献名したものである。

この論文を発表した際、タイプ標本に指定した個体の産地が Nagano, Kano と記されていたけなので、正確な地名を地図で探したが見出すことができなかった。このため、いずれ森本さんにお会いした折に、この記載個体の正確な採集場所を伺う積りでいたのに、今となってはそれを果たすことができなくなってしまった。そして、今更ながら今生で森本さんにお会いした折に、このことを含めて甲虫に関する森本さんの豊富な経験や広範な知識を吸収しておかなかったことが悔やまれてならない。謹んで生前の御交誼に感謝申し上げ、心から森本さんのご冥福をお祈り申し上げます。

ゾウムシはホソカタムシの貴重な副産物

青木淳一

〒106-0031 港区西麻布3-8-12

おそらく、私の名前は多くの分類学者の間ではダニの研究者として知られているであろう。しかし、私の経歴を振り返ってみると、少年時代から高校生までは甲虫大好き人間、特にホソカタムシにほれ込んでいた。大学生から横浜国立大学での勤務を終わるころまでは、その姿かたちが甲虫類にそっくりなササラダニ類というダニ類の新種を記載しまくり（約460種の新種）、大学定年後の神奈川県立博物館勤務時代から、再びホソカタムシの研究に舞い戻ったのである。

昆虫採集という懐かしい行為、大人としてはちょっとばかり恥ずかしさを憶える行為も、熱中し始めると私にとっては素晴らしい老後を約束してくれた。ホソカタムシを採集するには枯れ木が目標となる。細い枯れ枝はピーティング、太い立ち枯れ木はフォギングという方法で行う。その際に、ホソカタムシ以外で最も良く採れるのがゴムシダマシとゾウムシなのである。採集から帰ってきて、まず行うのが採集品の類別であり、約20人の専門家へ発送する。採れてしまった甲虫を捨ててしまっただけでは申し訳ない。と同時に、もしかしたら珍しいものも入っているかもしれないという期待もある。

しかし、採集の現場でホソカタムシが一向に採れずに、ゾウムシばかりが採れることも多い。そ

んな時には頭にきて、ゾウムシなんかひねりつぶしてしまおうと思ったこともある。しかし、標本が届くと、いつも真っ先にお礼状とともに全部の種の同定結果をすぐに知らせて下さる森本さんのお顔を思い浮かべると、1匹も捨てられない。とくに、奈良の春日大社の近くの森で採れたものについて、青木淳一様「春日大社のゾウムシは大変な珍品です。私が初めて見る新属新種のように、セーシェルとサモアから3種知られている *Catolethrobium* に近似します。先にお送りいただきました新属新種についても、KOH処理をして土のような被覆を除去してみると、複雑な表面構造が出てきました」などというお返事をいただく、「ああ、棄てないでよかった」と胸をなでおろした。

その後、はじめて九州大学総合研究博物館へ森本さんをお訪ねした。私よりも1歳年長の森本さんとは虫と虫屋さんの話が大きい合った。研究室の引き出しの中には、ゾウムシの亜科ごとに記載すべき原稿や資料がきちんとまとめてあった。もうすぐ、キクイゾウムシ亜科がまとめられると嬉しそうに見せてくださった。しかし、それも間に合わずに、旅立たれてしまったのは、どんなに無念であったろうかと胸が痛む。